

歴史デモグラフィー* と民俗学との対話

Dialogue between historical demography and folklore

アーサー E. イムホフ

翻訳 (有山 輝雄 小林 宏一)
(福田須美子 山中 正剛)
(吉田 文彦)

私は過去10年ベルリンに住んで、仲間と一緒に歴史デモグラフィーの研究を進めてきました。本日は私どもがどのような類の資料を使って研究を進めているか、そこから得られた研究成果がどの程度信頼できるものか、その判断を得たいと思います。同時に歴史デモグラフィーの方法論に関する若干の用語について述べ、そこからこの種の方法論、アプローチによって何をなし得るかを読みとって頂きたいと思います。

歴史デモグラフィーあるいはデモグラフィーには、すべての人間に共通する三つのトピックスが含まれています。出生と死、さらに必ずしもすべての人というわけではないが大部分の人が経験する結婚がそれです。ほかに移住に関するものがありますが、ここでは取り上げません。

ドイツには *Völkerkunde* と *Volkskunde* という二つの系統の学問があって、それぞれ文化人類学と民俗学に相応しています。ベルリンをはじめドイツの大都市にはどこでもこの *Völkerkunde* と *Volkskunde* の2種類の博物館があります。たとえばオセアニアとかポリネシアなどのようないわゆるプリミティブな社会の研究を行うのが *Völkerkunde* で、この学問を通じてニュージーランドやオーストラリアの原住民など

* 歴史デモグラフィーは *historical demography* のことであり、これまで一般的には「歴史人口学」と訳されてきた用語であるが、*demography* は元来 *demo* (民衆)+*graphy* (誌) の意味を持つ幅広い学問領域であると考えられる。「人口学」と訳してしまうと狭義となり、イムホフ氏の意図も十分伝わらないため、本稿では原語のデモグラフィーをそのまま使用した。

について学ぶことができます。しかし私自身は Volkskunde に強い関心をもっていて、話の内容も勢いこの方向に傾くことになると思います。ドイツとかスカンディナビア、スイスなど伝統的農民社会を基礎にする Volkskunde は、フォークロアまたはわれわれの祖先についての民俗誌的な方法を用いる民俗学の観点から行われる研究で、この学問がどういう性格をもつのかを例示するなら、日本でもよく知られている心性史をあげることができるでしょう。フランスの場合でいえば古代のフランス人の信仰を扱ったフランスのジャン・ドリュモア(Jean Delumeau)教授、死や子供への態度を取りあげたフィリップ・アリエス(Philippe Ariès)などが代表的な研究者であります。

ドイツの問題に立ち返って、子供が死んだときに親はどんなことを考えるか、亡くなった子供の跡継ぎを考えなければならない時親はどうするか、家族計画、死への態度、幼児の死をめぐる親の態度、このような問題は Volkskunde の研究分野であって、Völkerkunde の領域ではないといえましょう。日本でも似たような事情があるのではないのでしょうか。例えば文化人類学と民俗学、この場合の民俗学は Volkskunde に見合うものと思われます。

日本では近世の戸籍として宗門人別改帳があったと聞いていますが、われわれキリスト教社会でも、16世紀中頃からカトリック、プロテスタントの別なく教区毎の戸籍登記簿が作られてきました。この登記簿はその一頁を参考のために例示しますが(第1図)、キリスト教社会では登記簿には出生のほか結婚と埋葬の三つの種類の登記簿があり、いま例示した第1図は、このうち埋葬の登記簿から取り出したものですが、出生にしても結婚にしても原則は変わりません。

この図表は1719年のベルリン Dorlheenstadt 教区の死亡登記簿の79頁目の写しですが、そこには127番から136番までの10人の死亡記録が示されています。この資料からいろいろなことが解読できるのですが、ここでは想像力を刺激することを目的に二つの点に絞って話を進めたいと思います。この写しの最初の一行には、9月7日とあって、次に Eva Zimmermann という名前が見えます。Eva Zimmermann は女性の名前で、彼女は1719年9月7日に死亡したことがこれから分かります。Eva Zimmermann は死んだ。だがここで重要なのは彼女の死因で、「死因は赤痢」という記録が大事なのです。10人の死亡登記簿には10の死因が

	1719
79	
127	7.7. 7ter, Joh. Gunder Mannig, in Pösching, ist 78. J. alt, und d. 8. Dits auf d. Neug. Kirchhof begraben. Am
128	7.7. 7ter, Peter Linn, in Geas des Bogen, ist 78. J. alt, und d. 7. Dits auf d. Neug. Kirchhof begraben.
129	7.7. 7ter, Johann Christoph Bartsch, in Candidatus Theologie ist 78. J. alt, und d. 8. Dits auf d. Neug. Kirchhof begraben.
130	7.9. 7ter, Christoph Silling, in Leubitz, ist 78. J. alt, und d. 10. Dits auf dem Neuen Kirchhof begraben. Am
131	7.9. 7ter, Johann Peter Schönbauer, in Uerselb. Land, ist 78. J. alt, und d. 10. Dits auf dem Neuen Kirchhof begraben.
132	7.10. 7ter, Dorothea Charlotte Compost, in Uerselb. Land, ist 78. J. alt, und d. 12. Dits auf dem Neuen Kirchhof begraben. Am
133	7.10. 7ter, Maria Johann, Johann Johann, in Uerselb. Land, ist 78. J. alt, und d. 15. Dits auf dem Neuen Kirchhof begraben, in Misere 7. alt.
134	7.10. 7ter, Carl Peter Beyer, in Uerselb. Land, ist 78. J. alt, und d. 12. Dits auf dem Neuen Kirchhof begraben. Am
135	7.10. 7ter, Johann Christoph Beyer, in Uerselb. Land, ist 78. J. alt, und d. 12. Dits auf dem Neuen Kirchhof begraben. Am
136	7.10. 7ter, Dorothea Beyer, in Uerselb. Land, ist 78. J. alt, und d. 15. Dits auf dem Neuen Kirchhof begraben. Am

記載されています。列記されたこの死因は日本の方には読み難いと思いますが、私にはその読み難い文字を読み解き、死因を医学的につきとめることができます。しかし勿論この事実の解釈にあたって、医学とは方法論や用語法を異にすることになるでしょう。

まずこれら10の死亡原因を見たあと、死者の年齢に注目することにししましょう。その上でこれと同じ事柄を扱った今日の資料を示して、1719年と今日では何が違っているかを示すことにしたいと思います。

リスト第一番目の死因は赤痢で二番目の死因も同じ赤痢です。もし同じ日に死んだ人たちのうち何人もが同じ原因で死んでいたとすれば、これを伝染病によるものと考えるのは不自然ではないでしょう。第三番が結核、次が高熱、次が下痢による死亡と書かれ、後でまた赤痢が登場します。

「下痢」、また下痢です。「歯が生えてきたため死亡」。これは面白い、歯痛で死んだということです。皆さんは、これがどういう意味かわかりにならないでしょう。わたくしは、後ほど説明するつもりですが、これには意味があるのです。次のは、「下痢により死亡」、また下痢です。そして、最後のは、「赤痢により死亡」、また赤痢による死です。

さて、これまでの10ほどの死因を憶えておられれば、何かおわかりになったでしょう。死因は、赤痢、下痢、歯痛、肺病、高熱などです。全て病気の症状です。こういったものを何と呼んだらいいのでしょうか。これらは、病気の症状の描写です。それは、ギリシャ語でいう「疾病分類学」にあたります。現在では、病気の症状のために死んだというような言い方はしません。現在では、どんな医者にかかっても、4,000もの異なった病原学的、生物学的原因によって死ぬことになっています。ですから、人が死ぬこと自体は何も変わっていないのですが、症状ではなく、生物学的原因で死ぬというふうに大きく変わったのです。これは重要な事です。何か症状があるとします。例えば、当時も両親は子供が死ぬかどうか心配しました。そう、ここに「1歳で死亡」というのがあります。1歳で「歯が生えてきたために」死にかかっている赤ん坊がいるわけです。皆さんは、両親がどうしたか、おわかりになると思います。両親は、最初の歯が生えてくるのを見ます。丁度歯が生えてくる時期です。これは苦痛ですから、赤ん坊は泣きだします。そして、赤ん坊が死んでしまったら、赤ん坊は歯のために死んだということになるのです。

下痢になれば、勿論、症状はもっとよくわかります。現在では、我々は、心臓発作とか、その他の生物学的原因によって死にます。誰かが病気の症状を示せば、両親や牧師とか、あるいは誰であれ、その人をよく見て、症状をわかろうとします。そして、暫くすれば、自分でも体に何が起きたか知ります。ところが、みなさんの誰かが現代の病院で死にかかっているとすれば、医者は皆さんを人格をもった人間として見ようとはしませんし、高熱にうなされていることも見ません。医者にとっては、体内の生物学的原因によって死にかかっているのです。人格をもった人間として死にかかっているのではないのです。こうした生物学的原因を分類するのを現在では病原学と呼んでいます。

次に、皆さんに死亡年齢をお見せしましょう。ここに10人の事例があります。たいていの日本人は小型の計算器をお持ちのようですが、小型計算器を使えば、すぐに計算できます。ここでやってみます。10人の死亡年齢を計算して、合計し、10で割ってみましょう。そうすれば、200～300年前の平均寿命を計算できます。多分、皆さんは驚かれるでしょう。これは、40歳です。ここに「40」と読めますね。次のは、24.5歳。次のは、30歳。そして、これは5歳。これは、4分の7歳。ということは、1.75歳です。53歳。1歳。65歳。最後は、4.5歳。これを合算すれば、256.75。これを10で割れば、今から2世紀半前の平均寿命は、25歳だったのです。ただ、いま重要なのは、平均寿命について話すことではありません。期待できる平均寿命が25年である時に、人々がどのように行動したか、お考えになりましたか。25年の人生しかないのなら、子供も持てないのですから、社会を再生産していくのは不可能です。しかし、我々は平均寿命とか、平均結婚年齢とか、なんでも平均について話すことに馴れっこんでいます。というのは、人生の過程で起こり得ることを標準化して考えてきたということです。しかし、重要なのは、平均ではありません。このような資料の構造を見なければなりません。重要なのは、平均からのバラツキです。ある人は1歳で死に、他の人は65歳、また他の人は4歳、更に別の人は53歳で死ぬというわけです。そして、民俗学者にとって、また歴史家にとって、重要なのは人生が不確実なものであったということです。当時の人は、誰でも、標準的人生の見通しを70歳などと期待できなかったし、まして今や女性では80歳にも達し世界で最も平均寿命の高い日本人のような期待はもてなかったのです。こ

れが、当時の実情だったのです。

現在では、平均寿命は随分長くなりました。少なくとも、我々の90%は、長い短いの差はあるにしても当時の平均寿命より長生きします。その当時重要だったのは、人生が不確定だということでした。例えば、教育を受けるということを考えてみましょう。現在では学校に行ったり、更に大学に行ったりすることは、人生の設計にとって投資する価値のあることです。多分、我々自身の人生にとってそうでしょうし、また恐らく我々の子供たちの人生にとってもそうでしょう。今日では、投資から何かを得ることを期待できるのです。しかし、当時は、決してそれは確かなことではありませんでした。子供は、8歳で死ぬかもしれなかったのですから、子供を学校にも行かせられませんでした。

さて、第2図を見ましょう。この間に何が起こったかわかります。これは、皆さんよくご存じのことです。これは、1983年のフランクフルトの新聞からとった例です。フランクフルトの墓地の登録です。これをご覧になれば、名前だけでなく、年齢まで分かります。81歳、83歳、78歳、76歳、67、77、84、77、84、77、64、95、93などなどです。人生コースは、標準化されています。この平均寿命は、人々に何か確実なことを意味しているのです。200年前の人々にとって、平均寿命25歳には、なんの保証もなかったのです。ですから、歴史の構造が現在とは全く異なっていたことを念頭に置いておかねばなりませんし、また歴史家は、このことを常に説明していく必要があります。

さて第3図は、歴史デモグラフィーの方法論を皆さんに示しています。この方法について、皆さんがお聞きになりたいことを簡潔に説明しようと思います。この方法は、家族再構成法と呼ばれています。社会史、歴史家族社会学では、個人に対してはそれほど関心を持たず、最小の社会的単位に関心を向けます。それは、日本でもそうですが、家族です。この方法は、資料の操作によって過去の家族がどんな種類の家族だったのかを描き出します。ですから、個々人について、あれこれ検討することはせず、個々人は家族を構成する一単位として組み合わせられます。

これらをいちいち説明するのは時間の浪費ですから、基礎的資料をお見せしましょう。この方法では、研究者は教区登録簿を手に入れなければなりません。そして、出生登録、結婚、死亡を調査し、それらがどのように組み合わせられるかを明らかにしていく必要があります。勿論、現

Fronkjunier

Grund- schau

Donnerstag, 22. September 1903, Nr. 220

Bestellungen

am Donnerstag, dem 22. September 1903

7.30 Ullrich, Margarete, geb. Weiss, Carl-Coerders-Strasse 19, 81 Jahre
 8.00 Seuer, Margarete, geb. Gellz, Lanze-Strasse 10—12, 83 Jahre
 8.20 Hilt, Elsa, geb. Fiel-schoner, Neppelsburg, 71 Jahre
 9.00 Kehlend, Liesel, geb. Krahe, Köber-Strasse 11, 74 Jahre
 9.20 Franzenbach, Oswald, Fabrikstrasse 90, 67 Jahre
 10.00 Möller, Jostph, Hermerweg 12, 77 Jahre
 10.30 Gahr, Elisabeth, geb. Schubert, Weberstrasse 38, 84 Jahre
 11.00 Schwanitz, Marie, geb. Schmitt, Neppelsburg, 77 Jahre
 11.30 Wittke, Emil, Landauer-Strasse 22, 84 Jahre
 12.00 Meißner, Marie, geb. Erdmann, 85 Jahre
 13.00 Meißner, Marie, geb. Erdmann, 85 Jahre
 13.00 Meißner, Marie, geb. Erdmann, 85 Jahre
 14.00 Eickhorn, Christel, geb. Kerschell, Langenackerstrasse 2, 77 Jahre
 15.00 Mordtschke, Carl-Ludwig, Oberrainel/Traunstrasse, 39 Jahre
 16.00 Brubner, Maximilian, Im Mellisig 23, 75 Jahre
 16.20 Schuppert, Erich, Allmendstrassen, 61 Jahre
 17.00 Frank, Erzbart, geb. Meitz, Roberberweg 106, 73 Jahre

Westphalener Friedhof

9.00 Frank-Wiesse, Lette-Lore, Am Römerhof 22, 69 Jahre
 9.30 Kerschmer, Maria, Nirdelsteinstrasse 115, 54 Jahre
 10.00 Köhler, Elisabeth, geb. Moos, All-Praubelweg 48, 89 Jahre
 10.30 Mischel, Emil, Midehstadt, 74 Jahre
 11.00 Jönnick, Barbara, geb. Dahmer, Instlerburger Strasse 37, 45 Jahre

第3図

FAMILIEN- NUMMER	PERS.-NR. MANN	AUS GESCHLECHT NUMMER	PERS.-NR. FRAU	AUS GESCHLECHT NUMMER	HEIRATSDATUM
03495	17 234	0197	36 893	0582	1680-03-26

JAH	1650	1660	1670	1680	1690	1700
	IIIIIIIIII	IIIIIIIIII	IIIIIIIIII	IIIIIIIIII	IIIIIIIIII	IIIIII
MANN	M-----	-----	-----	H-----	-----	----
FRAU	F-----	-----	-----	H-----	-----	----
KIND 1				X		
KIND 2				FT		
KIND 3				M-----	-----	----
KIND 4				M-----	-----	----
KIND 5				F-----	-----	----
KIND 6					F----T	
KIND 7					MT	

PERSONAL-NUMMER	GEBURTSDATUM	GEBURTSORT	ALTER	TODESDATUM
MANN 17 234	1653-10-24	RANSBACH	26	1709-11-08
FRAU 36 893	1656-01-11	WASENBERG	24	1721-04-13

				ALTER DER MUTTER	GEBURTEN- ABSTAND	
KIND 1	17 235	1680-04-22	WASENBERG	24	0 MON	1680-04-29
KIND 2	17 236	1681-03-27	WASENBERG	25	11 MON	1682-08-15
KIND 3	17 237	1683-05-02	RANSBACH	27	25 MON	1751-11-28
KIND 4	17 238	1685-11-29	RANSBACH	29	30 MON	1742-03-14
KIND 5	17 239	1688-04-18	RANSBACH	32	28 MON	1719-07-12
KIND 6	17 240	1691-10-25	RANSBACH	35	42 MON	1696-11-05
KIND 7	17 241	1695-11-29	RANSBACH	39	49 MON	1696-11-03

LEGENDE M MAENNLICHE GEBURT W WEIBLICHE GEBURT X GEBURT UND

在ではコンピューターを利用します。歴史デモグラフィーの研究をしよ
うとすれば、個人的な調査作業というわけにはいきません。個人では、
到底手におえないのです。

歴史デモグラフィーは、社会史研究というだけでなく、研究そのもの
が社会的なのです。ベルリンで、教会に小型コンピューターを持ち込み、

HEIRATSORT ANZAHL GEBORENE KINDER ANZAHL UEBERLEBENDE KINDER

WASENBERG 7 3

1710 1720 1730 1740 1750

IIIII IIIIIIIII IIIIIIIII IIIIIIIII IIIIIIIII IIIIIIIII

---T

-----T

---H-----T

---H-----T

---H-----T

STERBEORT ALTER TODESURSACHE BERUF

RANSBACH 56 ABZEHRUNG BAUER

WASENBERG 65 VOR ALTER

HEIRATSDATUM HEIRATSORT IN FAM. GEBURTEN
GESCHL. NR.

WASENBERG 7T

RANSBACH 1 ZAEHNE

RANSBACH 68 ABZEHRUNG BAUER 1710-01-14 RANSBACH 0781 03511 6

RANSBACH 56 1714-11-06 RANSBACH 0056 03512 0

WASENBERG 31 KINDBETT 1709-10-15 WASENBERG 0582 07493 3

RANSBACH 5 BLATTERN

RANSBACH 111 BLATTERN

TOD IM GLEICHEN JAHR H HEIRAT T TOD

そこで作業ができる学生のグループを私は組織しています。他のグループは、古文書館で同じような方法をとっています。そして、我々は、データベースを作り上げつつあります。最近の3世紀の寿命とか、平均子供数とかいったものを知りたいのならば、約10,000の家族事例を手に入れねばなりません。そうでないならば、信頼性はないでしょう。2家族

の事例しかないのなら、平均の子供の数は3人だったなどと言えないでしょう。ですから、研究グループを作って仕事をしなければなりません。歴史デモグラフィーは、その研究においても社会的なアプローチをとるのです。

さて、第3図は、再構成された家族の一事例です。私は、こうした事例を数千持っています。

コンピューターは、常に二つの作業をします。上の方に家族を表示し、下の方に家族の出来事を表にしています。コンピューターは、いつも時系列的に進めています。ここに、16, 50, 51, 52, 3, 4とか、1660, 1670とかあるのがおわかりでしょう。

続いて、個々の家族成員別のライフ・コースが掲げられています。この場合では、夫婦に7人の子供がいることが分かります。コンピューターは、常に親が誕生した時点から始まります。そして、家族が続く限り、つまり末子が死ぬまで右方向へ続いていきます。

さて、図は、夫、そしてその妻の誕生から始まるわけですが、二人は1680年に結婚し、夫は1709年に死亡し、妻は寡婦として生き続けます。子供は7人です。第一子は生まれて間もなく死亡し、続く女の子は2歳で亡くなっています。これに続いて、長命な男子が登場します。よく見ていきますと、彼は1710年に農業を継いでいることが分かります。これはヨーロッパの一つの制度でありまして、息子は、父親が死んで始めて跡を継ぎ、自らの家族をもてることになっていたわけです。さて、残りの子供たちについてですが、この点は家族社会学に関わる分野でもあり、私達も家族社会学者と討論しあっておりますが、たとえば、この家族の場合にも拡張期とそれに続く退潮期が認められ、このように時間軸をたててみると、この家族がどのように展開してきたかが明らかになります。こうして、フィリップ・アリエスと同様、「死に対する態度は、当時どのようなものだったか」という問いかけができるかと思えますし、これらの子供達は、家庭内で何度くらい死に直面したかについても、この図から直ちにわかります。

さて、下半分の部分を見てもらいますと、同じことが今一度出てまいります。これは、家族内の出来事の一覧表で、これから正確な誕生日、ある教区から他の教区へというミクロな移動の事実、さらには、それぞれの子供が生まれた時点での母親の年齢もわかります。こうしたこと

が、コンピューターにより処理されているわけです。続いて掲載されているのは子供の出生間隔です。その後は、死亡届に関するデータ、死者の埋葬された教区、死亡年齢、死因といった順になっています。死亡年齢は、人により7日、1歳、68歳と大きい差のあることがわかります。

私がここで重要なこととして申しあげていることは、こうした作業によりどんなタイプの問いかけができるかということです。16世紀から20世紀にかけて1万にもものぼる家族を対象にしてみますと、幾つかの発展過程が見えてくるといことが銘記されるべきです。私達は、コンピューターを介して、16世紀半ば、17世紀半ば、そして18世紀半ば、さらにそれ以後の世紀において、両親が一体何人位の子供を養っていたかを探ることができるようになります。こうした作業は、データベースを構築してしまえば、後は簡単です。

ところで、皆さんは、宗教、それも教義としての宗教ではなく、民間信仰レベルでの宗教に関心をお持ちかもしれません。その上で、結婚に関するデータを見ますと、この夫婦は1680年3月26日に結婚しております。ヨーロッパ史に通じた人にとって、これは大変奇異なことになってきます。こういうことは起こるはずのないことなのです。といいますのも、ヨーロッパ史のもとで、しかもカソリックの影響下にある場合には、結婚することを許されない時期が年に二回あります。それは、四旬節（イースターに先立つ7週間）と、降臨節（クリスマス前の約4週間）とであります。この期間中、人々は性的関係を持つてはいけなし、結婚してもいけないことになっています。ここにある例のように、3月に結婚しているとすれば、これは普通ではないということになります。といいますのも、3月は四旬節にかかっているからであります。しかし、ここで第一子の出産間隔をみますと、何と0か月ではありませんか。なにがあったかお分かりでしょう。花嫁は結婚に先だって妊娠し、出産間近になっていたわけです。ヨーロッパ社会では、庶出は避けねばなりません。庶出を回避するため、彼らは牧師のところへ駆け込んで、子供が庶子にならないよう例外として四旬節中に結婚したというわけです。これにより、母親が結婚後1か月で生んだ第一子は実際嫡出子になっています。

取り上げたいことは多いのですが、ここでもう一つ言及しておきたいことがあります。それは、歴史的時間のもとで、家族規模は一体どれく

ら이었다かということです。ここの例でいきますと子供は7人です。上記データおよび以下のデータから、ヨーロッパにおける結婚のパターンが窺えます。彼らは晩婚であります。花嫁は24歳、花婿は26歳です。この点についてはすでに言及しておきましたが、彼らが農家を継ぐためには父親の死を待たねばなりません。彼らはただ単に結婚するのではなく、新たな家族をささえる生活の根拠を確保しなければならないのです。そして、子供を生んでいる母親の年齢を見ていきますと、彼女達は39ないし40歳で出産を止めています、これが通例で、それ以後45歳まで、つまりこの5年間は生物学的に出産可能であるにもかかわらず子供を生んでいません。つまり、それ以前に出産を止めているわけです。ある女性が例えば25歳で結婚したとして、最後の子供が39歳時点の子だとすれば、子沢山にはなりえないことになります。

この点に関し、民俗学者は次のような問いかけをするかもしれません。すなわち「この年齢以前において、彼らはどのように性衝動を処理していたのだろうか」と。思春期の訪れが遅かったとして、「どうしてそれがわかるのですか」と問われます。ライブツィヒの有名な少年合唱団についてはすでにご存じかもしれませんが、この合唱団で、団員が一体何歳までボーイ・ソプラノで歌えたかを知ることは可能です。というのも、彼らは思春期を迎えた（声変わりの始まった）時点で団を去らねばならないからです。200年前には、彼らは18歳で去っています。今日、彼らは12歳時点で去らねばならないようになっています。このように思春期の問題についての答えをだすことができます。

だが、性衝動の処理については、依然、疑問がのこると思います。結婚までの10年間、純潔のまま暮らすなどということは考えられないことです。ここにソドミーの問題が出てまいります。当時、ソドミーは社会的に容認されておりました。ここで言うソドミーとは、例えば牛と性交渉を持つということで、これによっては当然のことながら庶子は生まれません。庶子は社会全体で面倒をみる必要があったわけですが、男子、あるいは女子が動物と性関係を結んでいる限り、子供が生まれる気づかいはないわけです。こういう風に考えることは、そうやすやすと受け入れられることではないだけに、考えるだけでも興味をそそられます。しかし、実際そうだったのです。フランスには、この問題に対するスペシャリストがおりまして、ジャン・ルイ・フランドラン (Jean-Louis Fran-

drin) が、性衝動の歴史をめぐる数冊の書物を著しております。彼の調べた結果によれば、事情は上記の通りだったのです。

さて、ここでの問題は、もし産児制限——それは社会的な制限ということになります——があるとするれば、ある年齢まで結婚が許されないということになります。これは社会的制約であり、さらにいえば、結婚に関する制約であります。これに加えて、39ないし40歳以上は子供を生むのを止めています。しかし、このデータの出産間隔を見てみますと、彼らは、40歳前後の時点で子供は充分だと考えていたようです。すなわち、第一子と第二子との間には11か月の間隔がありますが、第二子と第三子の間は25か月、以下、30、28、42、49か月となっています。通常の出産間隔はどれくらいなのかは、婦人科医、男性科医 (andrologist) のところに赴いて尋ねるべきことです。では、私たちは、いずれの場合に家族制限を問題にすべきであり、どの場合は問題にすべきではないのでしょうか。手短かに言ってしまうと、出産間隔が30か月——つまり2年6か月——を越えない場合は、(産児制限の意図のない) 通常の出産だといえます。母乳で育てている場合、女性には授乳期無月経 (lactation amenorrhea) という症状が出てまいります。したがって、出産間隔が30か月のこの場合には、産児制限を問題にする必要はないわけです。しかし、42か月、49か月さらには4年以上となってきますと、産児制限の問題について問わざるを得なくなって来ます。

こうしたタイプの家族計画を論ずるにあたり、まず、当時の産児制限について明らかにすることが可能であります。これは統計的に論証できることであります。そこで、次に出てくる問いは、彼らは一体どのようにして産児制限を行ったかということであります。彼らには、今日ヨーロッパで当たり前なものとなっている避妊ピルがあったわけではありません。隣の薬屋に駆け込んでピルを買うというわけにはいかなかったわけであります。

ここで、私達は民俗学 (Volkskunde) の助けを借りることになるわけです。印刷の誕生以降、15世紀末に至るいわゆる草本書 (herbals) ——薬草植物に関する書物——をひもといてみますと、地域固有の植物に関しその効能が記されています。当時は、町のあちこちに薬屋があった状態ではなかったのです。

私達は、こうした草本書のなかの家族計画に関する記述をチェックし

Sevenbaum / Savina. Cap. 23.



Sevenbaum heist auf Griechisch *Κεξδus*, auf Lateinisch *Sabina* oder *Savina*, *Ital. & Hispan. Sabina*, und *Gall. Dusanier*. Seines Geschlechts ist zweyerley. Das eine mit Cypressenblättern / von rauhen Stacheln / stark riechend / niedrig / breit und stets grünend. Seine Blüthe ist Leib rothfarb / ohne Frucht / wird in den Gärten gleich wie der Buchsbaum / gepflanzt.

Das ander Geschlecht ist dem *Lamariscen*stauden mit den Blättern gleich.

Es ist auch ein Kraut / welches man *Waldseven* nennet / davon wir in dem Theil von den Kräutern melden wollen.

Natur oder Complexion.

Sevenbaum ist trocken im dritten Grad und sehr dünner oder subtiler Natur. Ist etwas weniger bitter und geringer zusammenziehender Natur

als / dann der Cypressenbaum. Macht dünn und zertheilet / wie *Galenus* bezeiget.

Krafft und Wirkung.

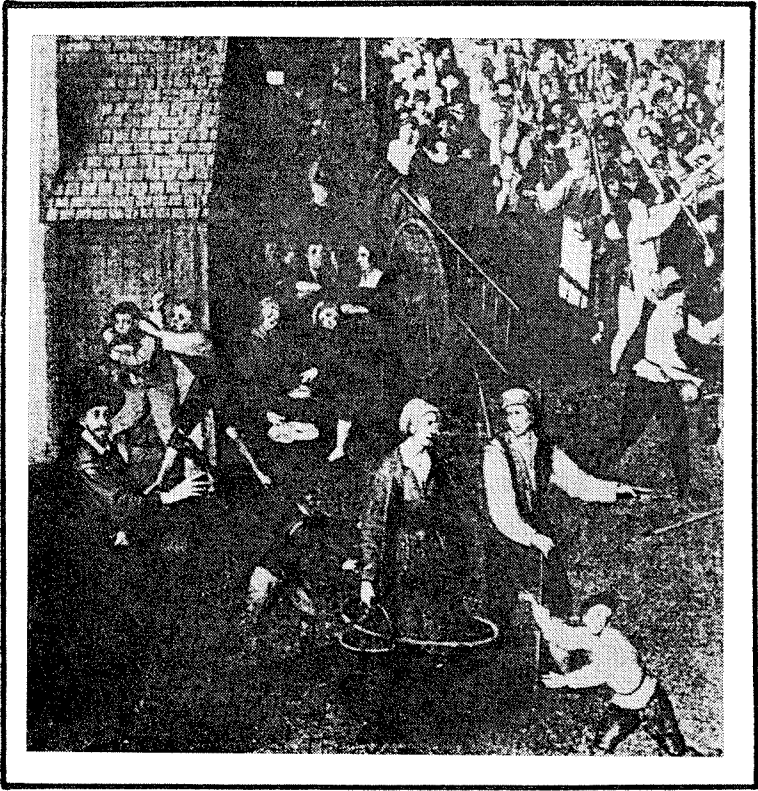
Die Blätter mit Wein getruncken / führen Blut auß dem Harn. Es brauchen dieses Kraut die all zu unverchämte und unzüchtige Weiber / die Empfänng der Geburt zuverhindern.

Weil aber solcher Gebrauch gottlos ist / wollen wir ihn verschweigen. Wer gern zu

てみたのです。ここで一つの例として、《Sevenbaum》という植物を取り上げてみましょう（第4図）。これは、地域固有の植物であり、日本に存在しているかどうかはわかりません。本には、この植物の図と記述があります。興味深いのはこの植物の「効能」に関する記述でして、「邪悪な婦人のみが、妊娠を避けるためこの植物を用いる」という意味のドイツ語の記載があります。このように、ここでは、墮胎ではなく、避妊が問題とされているのです。さらに興味深いのは以下のくだりです。「この用法は神に背くことになるので、それについては述べないことにする。」ですから、ここでは、それがはっきりと記されているわけです。即ち、当時は二通りの道徳律が存在していたわけです。

そこで私達は、それこそ何十冊もの本草書を調べてみました。その結

第5図



果、かなりの種類の避妊法が当時存在していた事がわかりました。

既に皆さんにお見せしたように、歴史デモグラフィ研究者として私は統計的な意味合いで家族計画が存在していたのだという事を実証できるわけです。ところで次に興味ある事柄は、その理由をつかむという事です。ここでは私は民俗学者と共同作業を行わなければなりません。ですからここでまさにチームワークが生まれるわけです。私達は相互の対話とでもいえる共同のセミナーを開きます。私達は私達の発見した事柄を彼らに伝え、また種々の質問を發します。彼らは彼らの見つけた事柄を私達に話してくれるというわけです。

さてここで私達は、美術史家の手をかりてもう一步先に進む必要があります。私達は、当時の私達の祖先の90%あるいは95%は文盲だったこ

とを知っています。彼らは文字が読めなかったわけです。ですから、例えばもう6人も子供があって、避妊の知識を得たいと思っているような婦人たちに、草本書を読める人が、その知識を伝えてやる必要があったのです。彼女達は一体どうやってこの知識を得たのでしょうか。この文盲の時代に、一体どうやってこの知識は伝えられたのでしょうか。

そこで私達は、美術史家の助けを借りることになります。この絵はパリのものです（第5図参照）。

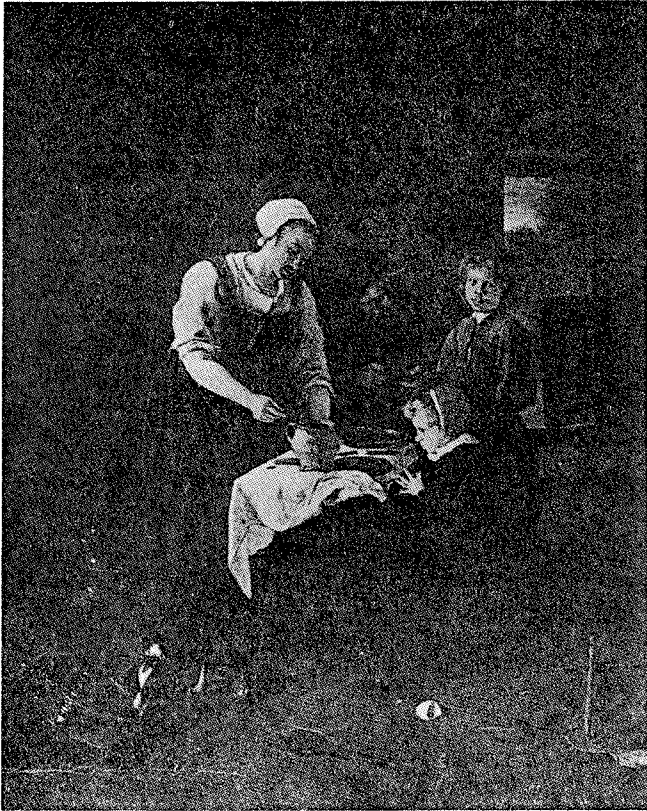
皆さんがご覧になっているのは、大きな絵の一部分です。今日私達は、各家庭その他至る所で水道を使用しています。もちろん当時も人々は料理その他に水を使わなければなりません。それでその頃は、水運び婦という専門の職業がありました。この図はパリの市中を描いたものです。こういった女性達は、知識の伝達者でもあったわけ。彼女達はまず、避妊の知識を持っている裕福で教育程度の高い家庭を訪れます。ついでこの水運び婦達は、教育程度も低く貧しい家々を訪れます。そこでは彼女達は、妊娠を防ぐにはどうすればよいのだろうかといった質問を受けることもあったでしょう。ですからこの水運び婦は、同時に知識の運び手にもなったわけ。

このように、研究者は単なる歴史デモグラフィ研究者と民俗学者との間の対話にとどまらず、さらに美術史家やその他の人々のもとにも足を運ぶ必要があるということが、皆さんにも良くおわかりいただけたことと思います。

以上お話したこと、即ち歴史デモグラフィは、異なった分野による様々なアプローチをまとめる一つのかなめの役割を果たすということが、私にとりまして新たな発見でありました。

それでも私達は美術史家の門をたたくとすると、いまだに少々気後れしてしまいます。というのは、彼らは私達の問題意識や方法にはなじみが薄いからなのです。例えば彼らは絵の色彩について述べたりするのですが、私達はそういったことには関心はありません。それでも、知りたいと思っていることを丹念に彼らに説明すれば、彼らは手を差し伸べてくれます。

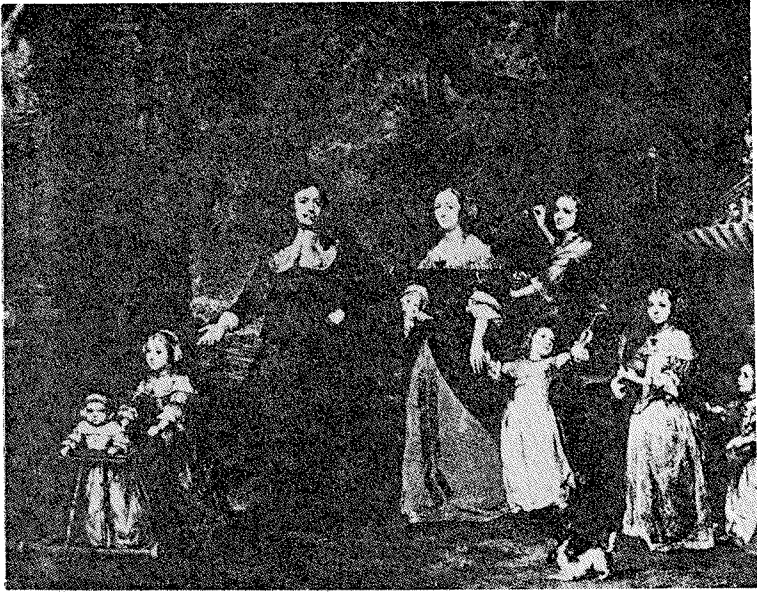
私達は、産児制限について話を進めているところです。さてここで、私はそれを美術史から実証してみましよう。もし皆さんがオランダか、オランダの絵画のある美術館に行かれることがあれば、もっともこれは



第6図 ジャン・ステーン (Jan Steen 1625/26—1679)
『食前の祈り』
子ども2人の家族 (1660年頃オランダ・カルヴィン派地方)

ヨーロッパのどの美術館にもありますし、また大抵の日本の美術館にもありますが、17世紀のオランダの家族の絵をご覧になって下さい。皆さんも西洋史からご存知のように、オランダの17の州の内、南部の10州はスペイン側についてカソリックを支持し、北部の7州はカルヴィン派について共和制に移行しました。

ところでカルヴィン派教徒達は、宗教を通じて最初に産児制限をとり入れた人々でした。というのはカルヴィン派では、両親こそが子供達に関して責任をもつものと考えられていたからです。ところがカソリックでは、子供を授かったりあるいは子供が天に召されて行くのはすべて神



第7図 ゴンザレス・コックス (Gonzales Coques (1614/18—1684) 『戸外の家族』
子ども7人の家族 (1664年カソリック派アントワープ)

の思召しにもよるものであり、私達のあずかり知るところではないとされてきました。二人の子供を教育・養育していくことは、もっと多くの子供達を育てることよりはまだしも容易なことです。それでカルヴィン派では、産児制限がいち早く取り入れられました。

17世紀のジャン・スティーンの手になる一点(第6図)には、母と二人の子供の家族が描かれています。私は独身ですので、秘書の女性達にこの子供達の年齢を尋ねてみました。彼らによると少女の方は4歳位、少年の方は11歳位とのことでした。この7歳という年齢差は、生物学的にみてかけ離れ過ぎています。従って皆さんは、こうして美術史家の助けをかりて、産児制限の証拠をつかむことができるわけです。

さて今度は同じく17世紀のカソリック派のオランダ家族を描いたコックスの絵です(第7図)。産児制限を行わない場合、どのような家族構成が生じるかは想像にかたくないところです。ここでは通常の出生間隔の少年と少女達が描かれています。家族計画はみられません。以上が美術史によるアプローチを用いた実証例です。

ところで私はこの方法をフィリップ・アリエスに学びました。彼の業績は日本語に翻訳されているとのことですので、皆さんも既にお読みになったかも知れません。彼はこの方法を用いています。彼は様々な家族の絵を見るために、多くの美術館やギャラリーを訪れています。

そろそろ終わりにした方が良さそうです。私が一番ご説明したかったのは、このアプローチだったわけです。さて討議に入ることにしましょう。

(質問) あなたはこの絵について話をされましたね。女性が水を運んでいるこの絵です。彼女達は知識の運び手だということでした。当時、他にも同じ職業についていた人々はいたことと思われまます。ですから、そのようなことは、この水運び婦についてしか言えないように思うのですが。

(イムホフ) 私は皆さんにたった一点の絵をお見せしただけです。私にとってより重要なことは、こういうことです。即ち、私達は私達の祖先の生活について想像をたくましくしなければならないということです。これは研究者にとって極めて重要なことです。私は人為的な出生間隔がみられるということをお見せすることができます。次に皆さんは色々な可能性を考えてみる必要があります。一体彼女達はどのような風に行ったのかと。皆さんは次から次へと疑問を発していかなければなりません。

(コメント) ですがデータには、混ざりものが入っているかも知れませんね。ということは学者によっては違った見方をとるかも知れないということになります。

(イムホフ) ごもつともです。その一つの解釈が私がここで話したことです。皆さんはいまだにそういったやり方をとっている社会をご覧になることができます。昨年、私はオーストラリアにまいりました。あちらには未開社会が残っています。アボリジニとマオリスです。ですから彼らは一体どうやって暮らしているのか観察することができます。従って、そのような習慣をもつ社会がいまだに生き延びているというこ

とが分かるわけです。つまり歴史家として皆さんは以前の世紀を垣間見ることができるわけです。

(質問) 出生登記簿や家族票等をどのように集め、またどのように使うのですか。

(イムホフ) 最初は、対象となる教会へポータブル・コンピューターを持った調査団を派遣するのです。現地で家族再構成に取り組むのです。

20年前、私がこれに着手した時はまだパソコンがありませんでした。日本がヨーロッパへ輸出しておりませんでしたので。ですからその時はデータを処理するために政府のコンピューター・センターに行かねばなりませんでしたが。しかし、今日ではハードディスク内蔵のパソコンにより巨大なデータの記憶が可能となり、更に多様な興味深いアプローチができるようになりました。例えば、パソコンを使うことによって、同時に三つの次元の図を描き出すことができるのです。

(質問) コンピューターを使って、家族再構成を行うことについてはわかりましたが、データから結論を引き出したり、あるいは仮説を立てる場合の方法についてはいかがなものでしょうか。

(イムホフ) いろいろなアプローチの仕方ができると思いますが、例えば私が再構成を試みた17世紀農村社会では、人々は、妻が出産不可能となる45歳という年齢段階で、家族の大きさについてどのような見通しを持っていたのでしょうか。このことに対し、彼らは成人する見込みの子どもを約3人持つべきだと考えていたことがわかりました。

では、どうしてそう考えたのでしょうか。高い乳幼児の死亡率を想起すればわかることですが、45歳までに子供がかわるがわる死んでしまうと、その後子供を持つことは不可能です。成人可能な3人の子供がいれば、それ以上は要らないのです。そこで3番目の子供を持った時、実際に彼等はどうしたのでしょうか。即座に止めたのか。まさかの場合のためにもう1人子供を持ち、結局は他の農場へ働きに出したりしたのでしょうか。こうした疑問が生まれてきます。

また疫病学者と共同で仕事をしますと、彼等は私達の調査に大変興味を示してきます。例えば、当時根強い疫病がありました。天然痘です。今日天然痘については調査することができません。なぜならWHOが天然痘は撲滅されたと言っているからです。そういうわけで、天然痘は今では子供の病気ではありません。かつてはそれにかかると死んだり、生涯治らなかつたりしたために、子供にとっては恐ろしい病気であったわけです。というわけで天然痘が一旦流行すると、次の子どもの誕生までに間があくこととなります。5～6年後に子供の数が増えるという具合です。

私たちは、過去の人口の推移に以上のようなことを読み取ることができるのです。

(質問) といいますと、過去の経験を実験室に見立てるということでしょうか。

(イムホフ) そうですね。ですがそうばかりではなく、現在の問題にも言及できるのです。今度は現在の問題とのかかわりでお話ししましょう。

昨年、私は少しの間ナミビアに行っておりました。そのいくつかの医科大学で講義を頼まれたわけです。現在ナミビアは政治問題等難しい状況を抱えています。人口構成は白人と黒人が半々です。予防接種計画を立てるとすれば、それは、経済的にも難しい問題ではないはずなのですが、異なった部族からなる国民の間には反対する者が多く、受けない者が多くであるという問題があるそうです。

こうしたことは、過去ヨーロッパにおいてもあったことです。19世紀の初頭、天然痘の予防接種の導入に際して、バイエルンで反対が起ったという記録があります。なぜなのでしょう。彼らは予防接種をすれば、幼児が天然痘で死ぬことはないということを知っていたにもかかわらず。なのになぜ反対したのでしょうか。実は天然痘による死によって家族計画をしていたからなのです。8人子供がいたとして2回天然痘禍に遭遇すれば、半分子供を失うことになる。天然痘の予防接種を行なうようになり、こうした形の家族計画ができなくなると、人口が増加することとなります。そこが天然痘の予防接種を単に導入するというだけでは

済まない点なのです。

「事前に家族計画をすべきだ」とか「家族計画をして4人の子供を維持すれば、予防接種でそのまま生き延びることができる」とでも言うべきでしょうか。ともかく、これは現在ナミビアで起こっている問題です。ここではすべての子供達をそのまま育てていくことができるほど豊かではないのです。

というわけで、歴史デモグラフィーは過去及び現在についても言及できるのです。

アーサー E. イムホフ (Arthur E. Imhof)

1939年スイス生まれ。ベルリン自由大学社会史教授。

主著・Einführung in die Historische Demographie, 1977 München

- ・Die gewonnenen Jahre, 1981 München
- ・Die verlorenen Welten, 1984 München

本稿は、1986年1月31日、民俗学研究所長・森岡清美氏及び「1920年代成城学園の社会史的研究」グループ（代表・山中正剛）の招きにより、成城教育研究所にて行われたイムホフ氏の講演「歴史デモグラフィーと民俗学との対話」の翻訳である。